



踏破撮影略圖



# 亞細亞大觀附錄

版權所有 不許複製

大連市山縣通一九三

編輯人 青山春路

發行人 島崎役治

發行所 亞細亞寫真大觀社

第二百十參回  
拾壹輯五回



## 北鎮の歴史

三室山人

- 一 城門長閑……………
- 二 雙塔の立つ城……………
- 三 明代の牌坊……………
- 四 北鎮の鼓楼……………
- 五 傳説の觀音堂……………
- 六 石群像臺座……………
- 七 毘盧庵……………
- 八 保安寺の石屏……………
- 九 東嶽仁聖殿……………
- 十 北鎮の八塔……………

大連市山縣通一九三

亞細亞寫真大觀社

電話二六二三五  
振替穴連七一八

發行 每月一回發行

# 北鎮の歴史

三室山人

滿洲の歴史上非常に大きな役割をつとめたのは遼河である。高句麗、渤海などの強大な勢力も西方は先づ此の河を境界として伸展しなかつた。と同様に支那の勢力も屢々この河から東に伸ばすことが出来ないで、遼東を放棄してゐる。北鎮はその遼河の西岸に近く、従つて西から東へ遼河を渡る時の足がかりにするのに都合がよい。支那勢力の東進する據點として絶好の位置にあつたことは、この地を早くから開拓せしめるに至つたに相違なからう。

西紀前三世紀の前半に燕が長城を河北省方面から今の遼陽へかけて築いたが、それは醫巫閭山を経てゐたと推定されるから、既にその頃から此の地方が除々に開けただらう。西紀前三世紀後半に於ける秦の長城建設の場合にも亦同じことが言へる。しかし此の附近が明かに史上に現はれたのは前漢の遼東郡無慮縣の設置によるもので、後漢の無慮も亦同じ地にあり、後漢書に無慮、有醫無慮山とあるが、醫無慮は醫巫閭山のことであるから、略々現在の北鎮附近にあつたことが推察される。

三國南北朝時代には支那の勢力が總退却をした關係から此の地方も史上では定かには現はれない。隋の煬帝が高句麗討伐を計畫するや、先づ糧食を遼河西岸の瀘河鎮と懷遠鎮に集積し、大業八年(西紀六二二年)今の北平附近から大軍を進發せしめた。これが第一回の遠征であるが大失敗に終り、翌年第二回遠征も不成功、翌々年第三回遠征には懷遠鎮まで進んだが支那國內に亂が發生し且つ士氣沮喪して軍を旋し結局失敗に歸した。唐の太宗が高句麗討伐をした時、亦殆んど同じ進路をとり、懷遠鎮に進むやうに見せかけて實は北に向ひ通定鎮に赴いて遼河を渡つたので高句麗が震駭した。この度々支那軍が遼河を渡る據點とした懷遠鎮は、實に今の北鎮附近に存在してゐたと推定される。唐代には懷遠縣は燕州の管内に屬してゐた。

唐の勢力は久しからずして遼東から退却し、辛じて遼西を握つてゐたので、この地方には守捉城が置かれたに止まるが、その守捉城といふのは多くて三百人位の兵が守備してゐる出張りの城である。遼東は渤海國の領土になつたが、遼河以西まで其の勢力が及んでゐたことは考へ難いから、渤海の顯德府がこの地に置かれたといふ遼史以下の説は採り難い。

この地方が史上で最も輝いて來たのは遼代である。遼の太祖の時の皇太子、後の東丹國人皇王は悲惨な生涯を終へたが、その子が三代世宗帝となるや醫巫閭山に葬つて其の陵を顯陵と呼び、陵に奉ずるために顯州を設けた。その顯州には奉先縣、山東縣など三州三縣が屬してゐた。世宗帝も亦この顯陵附近に葬られ、更に五代景宗帝が乾陵に葬られて、そのために乾州が置かれ、乾州には奉陵縣の他に三縣一州が屬してゐた。最後の帝天祚の墓も乾陵の旁に置かれた。遼代の諸帝は三代以來大體に於て人皇王の系統が即位してゐるので、顯陵へ帝が親しく參詣するのは殆んど歴

代皇帝のきまりだつたと言つてよい位である。これを以ても此の地方の隆盛になつたことが判るだらう。

それは今の北鎮は遼代の何州何縣であつたか、これが問題である。金史に遼の山東縣は金代になつて廣寧と改めたとあり、廣寧といふ名は其の後清代まで行はれ、民國になつて北鎮と改稱されたのであるから、遼代の山東縣が今の北鎮の地にあつたわけである。山東縣を統轄してゐた顯州は、金代の記録・御塞行程に廣寧の東三十里にして顯州に到るさあるので、北鎮東方三十里附近にあつたと見られる。所が一方では顯州は後の廣寧(北鎮)の地にあつたといふ説が、金代の旅行記・遼東行部志にあり、同じ説は大(明)一統志を始め多くの書が採つてゐる。これにも一理ある。日本の學界では大體前者に傾いてゐるが、しかしさう速断し難い點がありこれは更に考究を新たにしなければならぬ事と思ふ。

金代になると廣寧府(即ち今の北鎮)が斷然この地方の中心になる。それは如何いふ理由に基いた結果か知らないが、この一事が顯州は廣寧にあつたといふ説を生ぜしめた所以であり或はそれが事實に近く、顯州(治所は奉先縣であつた)と山東縣とは殆んど近接して不可分の位置にあつた時期があるのでないかとの想像も出來よう。御塞行程ただ一つの記事に重きを置くのは、未だ危険が十分ある。元代になると契丹人耶律留哥が遼王に封ぜられて此の地方を統治し、その子薛闡は廣寧府路都元帥府の長官となつて廣寧に住んだ。この時代には西方の醫巫閭山を祀る北鎮廟が崇拜され、屢々勅使を派遣されて居り、廣寧の地位も亦重要であつた。

明代にはここに廣寧衛を置き、洪武二十五年(西紀一三九二)には遼王が封ぜられ其の宮室も設けられたが、約十年の後、遼王は三代成祖(永樂)帝に至つて湖北省荊州に徙され、王府も亦廢された。この王府は北鎮城内の西北、萬歲山の南方にあつたものらしく、未だに明代の大礎石が散見するのは其の遺跡ださ傳へられる。しかし廣寧は依然として北族侵入を防禦すべき要地となり、特に隆慶四年(一五七四)以後萬曆年間へかけては李成梁が遼東總兵官となりよく大任を果した。現に北鎮にある石牌坊は其の功を表彰する爲に建てたものといふ。

清の太祖は天命七年(一六二二)を攻略した。康熙三年廣寧府が設けられ、民國二年北鎮と改めたが、その間には同治四年(一八六五)奉天の精兵が髮賊、捻匪を討伐のために支那へ出動した留守を覗つて匪賊三千餘人が包圍攻撃したが副都統銜花里雅春の力戦によつて難を免かれた事件や、光緒二十七年(一九〇一)にも亦匪賊千餘人夜に乗じて攻撃した事變がある。

今でこそ交通路が變化して北鎮は幹線をはづれた町になり下つて了つたが、昔から清代初期までの交通路は遼陽を出發して西北に向ひ必ず廣寧を経たもので、清代に都を奉天に移してからも、奉天を出てから廣寧を目ざして進んだものである。それほど廣寧は交通の要點を占めてゐた。

要するに廣寧は現在よりも過去に於て可なり重要な土地であり遼代以後隆盛になつたのであるから、遼以後の遺物遺跡が存在して然るべきである。



城門長閑

(鎮北省州錦)

北鎮は奉山線溝帮子驛から北へ七邦里、  
 スの便がある。北鎮の名は民國になつて改稱  
 されたもので、それ以前は廣寧と呼んだ。  
 滿洲事變の直後、十一月二十六日から七晝  
 夜、匪賊數萬に圍まれて籠城を続け、辛じて  
 皇軍の出勤によつて助けられたさいふやうな  
 歴史もあり、嘗ては可なり穩やかならぬ土地  
 であつたが、今は縣内から匪賊の姿を没し誠  
 に平和で長閑な所になつてゐる。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大観) (十一輯五回の1)

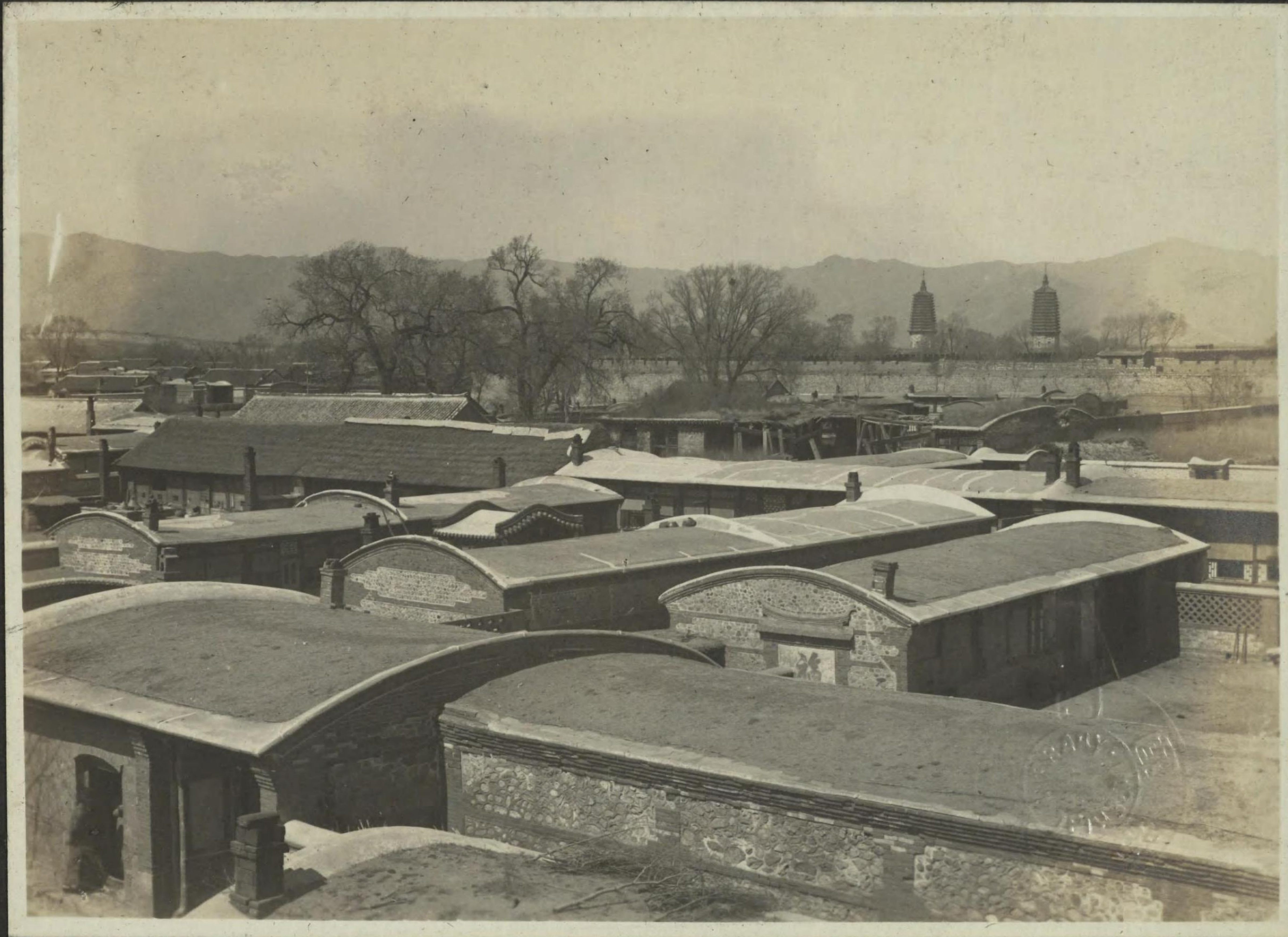
雙塔の立つ城

(錦州省北鎮)

北鎮城は滿洲第二といふ大さだ。東北隅に立つ二つの大佛塔は、北鎮の存在を高らかに誇るシンボルと言つてよい。塔は共に崇興寺境内にあるが、寺は既に衰へ雙塔によつて昔の宏壯さを偲ばしめるのみだ。地味瘦せて物質豊かでない貧縣であるから城内の民家も平房ばかり多いのが眼につく。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀) (十一輯五回の2)





坊牌の代明

(鎮北省州錦)

大南門を入つて北へ一直線に進めば、街路幅の中央に石造の大牌坊が立つてゐる。その下には横に天朝誥券と大文字が刻まれ、更に下方には鎮守遼東總兵官太保兼太子太保翁遠伯李成梁なごとのある。即ち明の萬曆年間に於ける遼東の名將李成梁が關係してゐる牌坊で、約三三四年前のものであり、かの興城の石牌坊と共に滿洲では珍らしい實例だ。

(印畫の複製を禁ず)

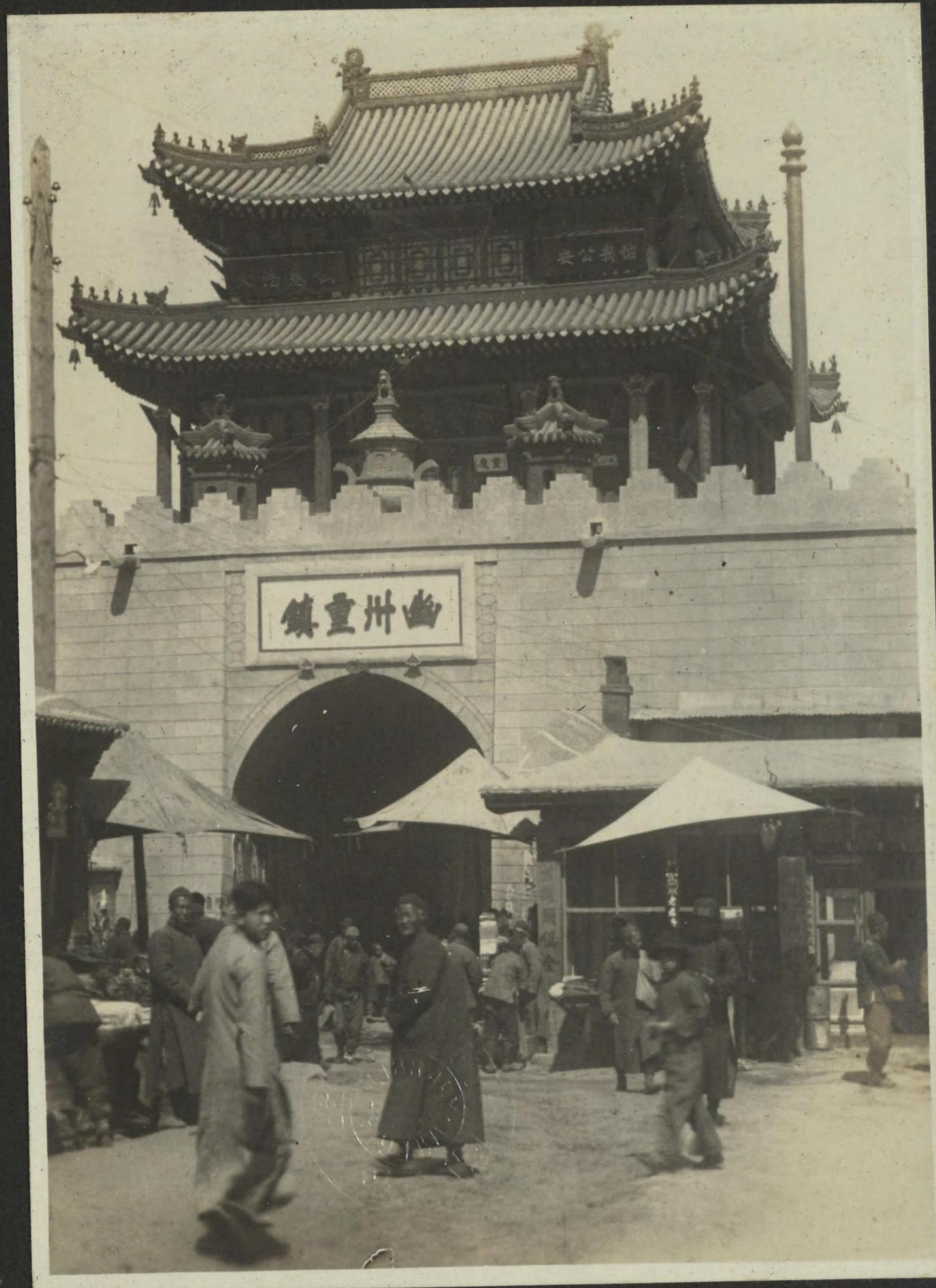
北鎮鼓樓

(錦州省北鎮)

石牌坊の少し北に新装の鼓樓が立つ。嘗て鐘樓も城内にあつたといふが今はない。この種の街路の中央に立つ建築物は、交通の發達を阻害する關係から、何時かは廢止の運命にある筈だが、北鎮では未だ斯る點に痛痒を感じないのであらうか、近頃になつて尙ほ一層力を入れて彩色を塗りたてて裝飾してゐる。それほど此處は田舎らしい平和郷である。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀) (十一輯五回の4)





堂音觀の説傳

(鎮北省州錦)

至劇はの半萬小の  
 るや元尉山過曆さ石鼓  
 所軍來運門から十寺子  
 に談武敬のあ一だ  
 廣の將徳入口つ年が並  
 ま上てが書にたの'ん  
 つであるるある古石そ  
 た一躍が、と觀だ。あ  
 だ。氣唐い音堂。あ  
 者太宗傳とした三  
 になつて、麗討。敬  
 傳説がの徳唐

(印畫の複製を禁す)

(亞細亞大觀) (十一輯五回の5)

石群像臺座

(鎮北省州錦)

城内東北隅、雙塔の北に小さく建つ崇興寺の境内に此の名作を見出したのは大きな歡喜だつた。これこそ在りし日の大崇興寺佛殿前に立てた塔籠か何かの臺座だつたに相違ない。もとより屋根と白色アーチの部分に近世の附加物に過ぎまい。六角の六隅を支承する男像は漢人種でなさうだ。金代を下らぬ優秀な彫刻で、恐らく遼代に屬するものであらう。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大観) (十一輯五回の6)







毘 盧 庵

(錦州省北鎮)

雙塔の西に接して建つ尼寺を毘盧庵といひ  
 正殿、前殿、門、僧房とある小寺さなだ。寫  
 眞は正殿だ、清末に出来たものらしい。  
 一風變つて面白いは屋根で、兩端を瓦葺  
 にしてゐるのに、中央部に藁葺の高屋根をか  
 ぶせてゐる。斯る屋根はこの尼寺のみでなく  
 、北鎮城内では他の寺でも用ゐたのがあり、  
 此所の一特殊傾向のやうに思はれた。

(印畫の複製を禁ず)

保安寺石屏

(鎮北省州錦)

保安寺は城内西北にある小寺で、明代の創建らしいが、現在の建築は新しい。山門を入つたところに此の石屏が立つ。この種の石屏を義縣志では遼石屏としてゐるが、遼代と斷言出来るほどの資料はあるまい。恐らく明末を下らないものではなからうか。唯一無二ではないがとにかく可なり珍しい石作品である

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀) (十一輯五回の8)





東嶽仁聖殿

(鎮北省州錦)

北鎮城外、東方三里の所に南へ突き出た丘陵があり、その前方に玉皇廟、後方に東嶽廟、即ち天齊廟がある。日本人が俗に地嶽極樂なごさ呼ぶのは天齊廟のことだ。この廟は嘗て可なり大規模だつたらしいが大規模な仁聖殿のみ完全に残り、木半頽廢して、今は仁聖殿のみ完全に残り、木の梁を上部に使つてゐないので無梁殿と俗に言はれる。明の弘治七年(西紀一四九四)に建てられたまゝ未だに傳へてゐる。

(印畫の複製を禁ず)

(亞細亞大觀) (十一輯五回の9)



北鎮の八塔

(錦州省北鎮)

城外東方三里の丘陵上にある玉皇廟の背後西方に八塔が群立してゐる。遼金系佛塔に類する五層塔が五、ラマ塔形が三、何れも小さなもので高いものでも十二三尺に過ぎない。南面に石刻の銘があるが、石質が軟かい爲に剝落して大半讀めない。一二の讀めるものを見るのに僧侶の墓であつた。

(印畫の複製を禁ず)

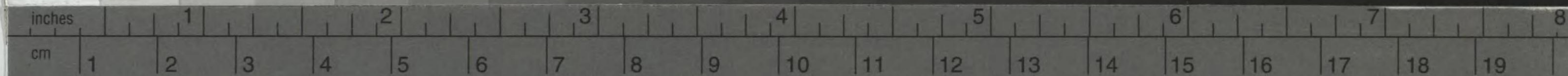
(大觀亞細亞) (10の五輯十一)

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

